

「七日市場の歴史(第五十二回)」

文人画家 細田香雨さん ③

曾根原 孝和

絵画追究の姿勢 香雨は、師藤森桂谷が亡くなってからは、大家といわれる方との交流はありましたが、師を持ちませんでした。その後のおよそ七十年間は、画風に変化や発展が見られますが、「無声の詩」としての絵画を追い続けました。

南宋画家として、柔らかな描線、主観的写実を軸とする手法をとりながら、風景・花鳥草木・昆虫などを写生していたようです。ですから、桂谷亡きあとの師は、郷里安曇野の自然だったといわれています。

野に生きた画家 香雨の生家は農業を主にしていましたが、子息が農学校を卒業する頃には、六反の畑を開墾し農地を増やしました。したがって、昼は厳しい労働で、作画は夜遅くまで行い、「東京の絵描きに負けてたまるか」が口癖だったといわれています。

子息亥八郎さんは、「香雨の絵は、精妙、流麗、器用とはいいいがたく、どこか土くさい粗い線があるように思います。しかし、その土の香り、しつかりとした粗い線こそ、百姓の手で描かれた必然性があります。香雨の作品にいささかでも生命があるとすると、それは安曇野に生きた百姓の生命のほとばしりではないかと思えます」と述べています。

絵画の紹介 安曇野市教育委員会は、令和三年三月『安曇野風土記Ⅳ 安曇野の美術』を発刊し、第二章「安曇野の文人画家」で細田香雨の絵画を紹介しています。

一つは、前述の有明山神社神楽殿の格天井絵「水仙」です。八一枚中の逸品八枚のひとつで、のびやかな筆遣いの表現といわれています。

二つは、「地域で活躍した文人画家」として、絵画三幅を紹介しています。それは、右に掲載した絶筆の「朝揮画筆」と「夏中寒泉図」「七草」です。それぞれには、漢文や詩が添えられ、絵と合わせて情景が目に見えかぶるようにしています。



(127 cm × 40 cm)